雷のさずけもの

楠山正雄

一

むかし、尾張国に一人のお百姓がありました。ある暑い夏の日にお百姓は田の水を見に回っていますと、急にそこらが暗くなって、真っ黒な雲が出てきました。するうち雲の中からぴかりぴかり稲妻がはしり出して、はげしい雷がごろごろ鳴り出しました。やがてひどい大夕立になりました。お百姓は「桑原、桑原。」と唱えながら、頭をかかえて一本の大きな木の下に逃げ込んで、夕立の通りすぎるのを待っていました。すると間もなく、がらがらッと、天も地もいっ

しょに崩れ落ちたかと思うようなすさまじい音がしました。お百姓は思わず耳を押さえて、地の上につっ伏しました。

しばらくしてこわごわ起き上がってみますと、つい五六間先に大きな光り物がころげていました。お百姓はふしぎに思って、そっとそばに寄ってみますと、それは奇妙な顔をして、髪の毛の逆立った、体の真っ赤な、子供のような形のものでした。

これは雷があんまり調子に乗って、雲の上を駆け回るひょうしに、足を踏みはずして、地の上に落ちて、目を回したのでした。お百姓は、

「ははあ、なるほど、これが話に聞いた雷かな。何だ、こんなちっぽけな、子供みたいなものなのか。」

と思いながら、半分は気味が悪いので、いきなり鍬を振り上げて、打ち殺そうとしますと、雷は気がついて、あわててお百姓を止めました。

「まあ、そんな乱暴なまねをしないで下さい。つい雲を踏みはずして落ちてきただけで、何もあだをするのではありませんから、どうぞ勘弁して下さい。」

こう雷はいって、手を合わせました。お百姓は、

「雷、雷って、どんなにこわいものかと思ったら、一度落ちると、からきし、いくじのないものだ。」

と思(おも)って、

「じゃあかわいそうだから助(たす)けてやる。だがこんどから落(お)ちることはならないぞ。そのたんびにびっくりするからな。」

といって、許(ゆる)してやりました。

すると雷(かみなり)は大(たい)そうよろこんで、

「どうもありがとう。何(なに)かお礼(れい)をさし上(あ)げたいが、あいにく何(なに)も持(も)って来(き)ませんでした。何(なん)でもほしい物(もの)があったらいって下(くだ)さい。空(そら)に帰(かえ)ったら、きっとおくって上(あ)げますから。」

といいました。

するとお百姓はしばらく考えていましたが、

「さあ、何かほしい物といったところで、このとおり体は丈夫で、毎日三度のごぜんを食べて、働いていれば、何も不足なことはないが、ただ一つ六十になって、いまだに子供が一人もない。これだけはいつも不足に思っている。」

といいますと、

「じゃあさっそく子供を一人さずけて上げましょう。そのうちお前さんのおかみさんにふしぎな強い子が生まれるでしょうから、それはわたしがおくってあげたのだと思って下さい。その代わり一つお願いがありま

す。どうぞくすのきで舟をこしらえて、水をいっぱい入れて、その中にささの葉を浮かべて下さい。」

といいました。

「何だ、そのくらいなことわけはない。その代わりきっと子供を頼みますよ。」

といって、お百姓はさっそくくすのきをくりぬいて、舟をこしらえ、その中に水をいっぱいためて、ささの葉を浮かべました。雷はその舟に乗って、またすうっと空の上へ上がって行ってしまいました。

二

それから三月（みつき）ほどたつと、おじいさんのおかみさんが急（きゅう）におなかが大きくなりました。そして間（ま）もなく男の赤（あか）んぼが生（う）まれました。

その赤（あか）んぼは生（う）まれた時（とき）から、ふしぎな子で、きれいな錦（にしき）の小蛇（こへび）が首（くび）のまわりに二巻（ふたま）き巻（ま）きついていました。そしてその頭（あたま）としっぽの先（さき）は長（なが）く伸（の）びて、赤（あか）んぼの背中（せなか）でつながっていました。

「さては雷（かみなり）が、約束（やくそく）のとおり子供（こども）をよこしてくれた。」

とお百姓（ひゃくしょう）はいって、夫婦（ふうふ）して大事（だいじ）に育（そだ）てました。

この子が十三になった時、お百姓は学問を仕込んでもらおうと思って、元興寺の和尚さんのお弟子にしました。

するとこの子は学問よりも大そう力が強くって、お弟子に入ったあくる日、自分の体の三倍もあるような大きな石をかかえてほうり出しますと、三尺も地びたがめり込んだので、和尚さんはびっくりして、この子はただものでないと思いました。

そのころこの元興寺の鐘撞堂に毎晩鬼が出て、鐘つきの小僧をつかまえて食べるというので、夜になると、だれもこわがって鐘をつきに行くものがありません。

それで長い間元興寺の鐘の音が絶えていました。

雷の子供はその話を聞いて、

「和尚さん、わたしを鐘つきにやって下さい。」

といいました。和尚さんは大そうよろこんで、出してやりました。するとその晩子供が、一人鐘撞堂に上がって鐘をつこうとしますと、どこからか鬼が出て来て、うしろから頭をつかまえました。子供は、

「うるさい、何をするのだ。」

といったまま、かまわず撞木に手をかけますと、その手をまた鬼がつかみました。子供はおこって、あべこべに鬼の頭をつかみました。そしていきなり鬼の

首を引き抜こうとしました。鬼はびっくりして、「これは驚いた、とんでもないやつが出てきた。」と思って、逃げ出そうとしました。けれど子供はしっかり鬼の頭をつかまえていて放しません。鬼は苦しまぎれに子供の髪の毛をつかんで、負けずにこれも首を引き抜こうと骨を折りました。どちらも負けず劣らぬえらい力でしたから、えいやえいや、両方で頭の引っ張りこをしているうちに、夜が明けかかって、鶏が鳴きました。すると、鬼はびっくりして、あわてて頭の皮をそっくり子供の手に残したまま、にげて行ってしまいました。

夜がすっかり明けはなれると、みんなが心配して見に来ました。そして子供がとくいらしく、髪の毛のついた鬼の頭の皮を振り回すのを見て、ますますびっくりしました。

鬼というのは、昔このお寺で悪いことをして殺された坊さんが、お墓の中から毎晩出て来るのでした。しかしこのことがあってから、二度と鬼の姿を見ることがなくなりました。そして鬼の残して行った頭の皮は、元興寺の宝物として残ったそうです。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年４月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：佳代子
２００４年２月19日作成
２００４年３月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。